

無眼界（一）

案内されたその相席は
ゼノンの矢が突き刺さったまま、時間が
そこだけ、停止している

！この席！？と、微かに指をさし
目で合図する

ボーイはOKと首をかしげ、戻っていった

視線ごと凍りついたように、向かいの先客は
表情も変えず 目線も動かさず
ひたすら前を見据えている

秩序の外から越境してきた私は
異次元の旅人として
席に影を落とし、的に背をもたせかける

水くみボーイが コップの水と 手洗水を持ってくる
定食^{タリ}を注文するが返事もせずに下がっていく
何も聞かないしやべらないよ、という気配…

向かいの男は 身動きせず 瞬きもせず
飢えたベンガル虎のように険しい表情で
ひたすら前を見据えている

真正面に向かい合っている
時の鏡に遮断され
虚空で寸止めになっている まなざし
やがて、オーダー係がやってくる
注文を済ませようやく空気に馴染んできた
ベンガルの虎に話しかけてみる

「何をじっと見つめているのかな？」
表情を変えず身動きもせず
射るようにこちらを見ている、けれど

ゼノンの矢は届いてこない

隠れ蓑を着て気配を殺している
つもりなのか

見られることを自らに戒め
見られることを拒んでいる

異邦からの幽霊の正体をはかりかねているのだろうか？

同じ国民服ケルマを着てヒゲを生やし

ベンガル語ではなく

英語とヒンディーで話しかける色白の東洋人

出自を示す印も身につけていない

視て無視すれば、諍いを招きかねない

微笑みを見せれば、その笑いを詰問されるだろう

一触即発の民族沸騰社会に

言葉の通じない越境者

何も知らない

知る意味もない

微笑むいわれもない他人だ

いつさい見ないことにする

いつさい言葉を交わさないことにする

挨拶しなければ宗教にも煩わされない

自分は居ないことにする

相手も居ないことにする

いつさい係わらないことにする…

お互い そこにいない

…ように振る舞う

秩序の流儀を

越境者である私も身につけてゆく

人種と文明のるつぼの中

繭のような虚空を分泌し自らを閉じ

紙一重を

棲み分けていく

撰氏五五度の白昼夢なのだろうか？

ガンガ（ガンジス河）にいたるバザール近く

行き交う歩行者、自転車、力車、

荷馬車、オート三輪、自動車、

牛、水牛、ラクダ、ゾウ

物売りのかけ声、ラジオの音楽、警官の警笛と怒号時おり悲鳴

そんな雑踏のざわめきの中

子供の叫びが聞こえてきた

聖なる牛が 男の衣服を啞えて引きずり回している

今朝がた路上に行き倒れ、硬直した遺体

取りすがる男の子も振り回されて

何度か路上に投げ出される

腹減らし牛は木綿の服を食おうとしている

力尽きた少年は嗚咽しながらよろけ追いかけ

干涸らびて涙も出ない

思わず牛を追い払おうとして、不思議な静寂に気づいた

誰もこの惨劇に注意を払うものがない

一人残された子の目の前で

死んだ男は牛にぼろぼろにされている

薄汚れた一枚の綿布を奪うために

野菜売りのババたちは

牛払いの棒を持っているけれど

自分の野菜が食われているわけではない

長いすでチャイ（ミルクティー）を飲んでいる男たちは

談笑に余念がない

誰も、何も見えない

見ぬふりをしているのでもない

ハリジャン
神の子、なのだ

不可蝕賤民とされてきたアウト・カースト

触れるどころか

見だけで穢れる、とされ

犬ネコ以下の存在

車で轢いてしまっても 罪に問われない
存在していないはずの存在

ブレーキを踏んだりすれば

見たことになる

つまり

穢れたことになる

ブレーキを踏む男はいない

このバザールに

何かを啜えている牛はいる

それが何かなんて 意味はない

まして、旅人

牛を追い払う意味はない